

## アメリカ合衆国における『ハックルベリー・フィン』論争 黒人描写と人種主義をめぐって

井 川 眞 砂

「アメリカ文学を代表する傑作」として、あるいは「アメリカの精髓を体現した本」として、多くのアメリカ人に親しまれているマーク・トウェインの『ハックルベリー・フィンの冒険』(*Adventures of Huckleberry Finn*, 1885) は、その執筆過程において非常に難儀した作品であるというだけでなく、100年余にわたる受容史においてもまたきわめて難儀な道程を歩んでいる。逃亡奴隷<sup>ディープ・サウス</sup>が深南部に向かうというプロット上の問題を抱えたために何度も執筆中断に追い込まれた後、9年の歳月を経てようやく完成した本作品は、1885年の出版直後に、マサチューセッツ州コンコードの公共図書館の書棚から追放される憂き目に会った。その理由は、本書の内容が不道德であり不敬であって、青少年に有害であるというものであった。住む家もなければ学校にも通わない、南部社会の最底辺に生きる浮浪児の少年が一人称で語る本作品は、当時のお上品な伝統からすれば、社会的にも文学的にもその基準に違反しているというわけである。しかし、あるいはそれゆえに、本書は初版の2ヶ月で5万1千冊(Kaplan, *Mr. Clemens* 269)の売り上げ部数を記録するというベスト・セラーになった。もちろんその人気は、奴隷制度をめぐって、正しいこととまちがったことの間で葛藤する主人公の健全な心が大勢の読者の心を捉えたからこそであろう。しかしながらその一方で、本書を排斥する動きは依然として続き、著者の生前にあたる1907年の報告によっても、毎年、合衆国のどこかでその現象が見られたという(Kaplan, “Born to Trouble” 14)。このような19世紀ならびに20世紀初頭の本書の追放は、いずれもお上品な道徳基準からの非難であり、その保守性は読者の側にあった。

ところで、1957年にニューヨーク市教育委員会が本書を認定教科書リストから排除した理由は、それまでのものとは趣が異なっている。合衆国における公民権運動の高まりの中で顕在化した本書に対する異議申し立ての声は、作品における黒人描写と人種主義をめぐむものであり、その保守性に対する嫌疑は作品に向けられた。皮肉なことに、逃亡奴隷を救おうと決意した主人公の語る作品の側にその嫌疑がかかっているために、また本書がアメリカ文学の傑作とされているために、本件をめぐむ論争は判然と賛否両論に分かれるだけでなく、穏健な表現ながらもその異議申し立ての声を「真偽の疑わしい人種主義 alleged “racism”」批判であるとして結局は無視同然に扱う者から、作品に対する高い評価はゆるがないものの、この異議申し立ての声に耳を傾けてそれを擁護する者に至るまで、きわめて多様な形の論争となっている。小中高の学校教育現場を大きく巻き込みながら、すでに半世紀近くにおよぶこの論争は、本作品批評に再解釈を促し、黒人描写に対する新たな

解釈をもたらした。本稿では、人種をめぐるこの作品が、多文化社会を迎えた合衆国社会においてなまなましい問題を提起しつづける事情、あるいは逆にこの作品をいまだに問題視してしまう合衆国社会の人種をめぐる問題性を視野に入れながら、1950年代以降の論争、とりわけ本作品が出版100周年を迎えた1980年代半ばから1990年代にかけての論争を中心に検討し、それによって本作品の黒人描写に関する受容の変化を考察する。

## 1 ニューヨーク市教育委員会の決定と人種主義論争の波及

ニューヨーク市教育委員会が小中学校の認定教科書リストから『ハックルベリー・フィンの冒険』の除外を決定したのは1957年9月のことであった。少なからぬ黒人読者がこの作品に人種主義的傾向を認め、以前から不満を抱いていたのである。本書に対する異議申し立ては、作品を読んで傷つく黒人の子供たちの父母から発せられた。<sup>1</sup> それは、10代前半の中学生が必修教科書(本書)の中で頻繁に使われる言葉(nigger)によって傷つくにもかかわらずその本への敬意を表さねばならぬことへの不満であり、抗議であった。<sup>2</sup>

上記決定によって、ニューヨーク市では小中学校の教室で『ハックルベリー・フィンの冒険』を使用することができなくなった。<sup>3</sup> 公的機関によるこの種の決定の最初の事例として1957年9月に本ニュースを『ニューヨーク・タイムズ』紙が報道してからというもの、本作品は各地の学校教育現場で激しい攻撃を受け、教室から追放される脅威にさらされた。ニューヨーク市に引き続き認定教科書リストから本書が除外されるようになったのは、ペンシルヴァニア州、ワシントン州、フロリダ州、テキサス州、アイオワ州、ヴァージニア州およびイリノイ州など、ひろい地域におよぶ。この傾向はおそらくまだ続くであろうという。ニューヨーク市教育委員会の上記決定の意味するところは、本書を必修教科書にすることの妥当性が公然と提起されたということである。

このような問題に直面して教育現場にどのような変化がおこったかを、『ハックルベリー・フィンの冒険』の出版100周年記念論文集によっても見ることができる。ジョン・C・ガーバーは、その序論で次のように記している。

この作品を攻撃する人たちに同調しているためであろうと、あるいは単に厄介な問題を避けたいためであろうと、上記以外にどれだけ多くの教師たちが講読リストからこの本を黙って除外しているかは誰にも分らない。以前は星印2つの推薦図書として推薦されていたのに、理由は何であれ、青少年の図書に関する図書館司書の聖書ともいべき高等学校文学図書目録に『ハックルベリー・フィンの冒険』は、もはや掲載されていない。(Gerber 3)

この作品は、アメリカ文学における19世紀の古典の中で、唯一今日検閲と追放に直面している  
そう捉えるのは上記ガーバーと同じ記念論文集に寄稿したジェイムズ・M・コックスである(Cox

387)。彼はこの問題をガーバー以上に深刻に受け止め、作品に対する黒人団体からの攻撃理由を必ずしも非難できないと考えるし、本書が学校や図書館から広範囲に追放される可能性があると認識している。その認識の下に、作品中の黒人描写を詳細に再検討し、ジムの描写に新しい読みを提示するという大きな成果を得た(「受け入れ難い本」“A Hard Book to Take,”1985)。その中で、彼は『ハックルベリー・フィンの冒険』が彼の愛読書であること、さらには彼が言論や出版の自由を認めていることを表明する。しかしそうではあっても、もし彼がフィラデルフィアかどこかでアメリカ文学を教えているとすれば、この作品よりも『トム・ソーヤーの冒険』(1876)か『アーサー王宮廷のコネティカット・ヤンキー』(1889)をマーク・トウェインのテキストとして選ぶだろうと述べ、上記の教育委員会の決定もやはり非難することはできないとする。それでも愛読書である本書を、こっそりと読む楽しみは確保したいコックスである(Cox 403)。

本書の出版100周年記念にあたる1984 - 85年の時期に、この人種主義論争はいっそう激しいものになり、新聞・雑誌をはじめとして、テレビにも登場するようになった。<sup>4</sup> ニューヨーク市教育委員会の公的決定を契機とする、ほぼ半世紀に及ぶ本論争の経緯を振り返ると、つぎの3つの時期に区分される(Arac 63 - 89)。第1期(1957 - 81年)は、本書を必修教科書とすることの妥当性が公然と提起されたことに対し、<sup>アカデミー</sup>学会が本作品の偉大さをもっぱら擁護するのが主要な動きであった。それに続く第2期(1982 - 94年)は、1982年に始まる。この年、ヴァージニア州フェアファックス郡にある、本作品著者の名を冠した「マーク・トウェイン中等学校」の教師、ジョージ・ウォレイスが本書を「塵屑のような人種主義の書“racist trash”」として厳しく非難したことによって大きな注目を浴び、マス・メディアを巻き込む一大論争に発展した。おそらくウォレイスの行動は、盛大に行なわれるであろう出版100周年記念祝賀行事を念頭に置いての異議申し立てであったろう。この第2期の論争が基本的には今日まで続いているといえようが、その論争内容にもうひとつの区切りをつけるとすれば、第3期(1995年 - )を置くことができる。その年、作家のジェイン・スマイリーによるあからさまな非難が、今度は作品に対してというよりも作者マーク・トウェインに向けられたのであり、また本作品の教授法をめぐる議論が始まったのであった。本論争が教育現場から発した問題であるだけに、その議論は学会だけにとどまるものではないのである。そして今日もまだその論争は続いている。

2000年1月26日に合衆国公共放送PBSが「カルチャーショック」シリーズ番組4編の中のひとつとして全国放映した『生まれながらの問題児 「ハックルベリー・フィンの冒険」』は、本書をめぐる全米各地の教育現場の状況を賛否両派の立場から紹介するものであり、学校現場で本書がもたらす衝撃の大きさと深刻さを伝えるものであった。このドキュメンタリーに付された教師用指導冊子は、差別語である「ニガー」を避けることなく教室で取り上げることによって、作品理解を深めようとする立場をとる。<sup>5</sup>

いったいなぜ、100年以上も昔に出版された1冊の本をめぐる、合衆国でこのような人種主義論

争が長期にわたり展開するのか。先述のコックスがこっそり本書を楽しむのとはきわめて対照的に、この問題により積極的に取り組み行動するのは、ジョナサン・アラックである。彼は、本論争が激しくなった1980年代半ばに本件の検討に着手し、10年の歳月をかけて調査して『「ハックルベリー・フィン」その光と影 現代における批評の機能』（1997）を著した。彼の著書は、論争の経緯のみならずその背景となる本作品の正典化の政治学を分析した貴重な労作となっており、アメリカ文学史上キャノンの頂点に位置づけられたこの作品の考察、および本論争の検討には欠かせない。<sup>6</sup>

1980年代半ばにアラックが本件の調査を始めたとき、すでに本書は、必修テキストとして第2次大戦後の学校カリキュラムの中に不動の位置を占めてきていた。だからこそ、ニューヨーク市教育委員会による先述の決定もなされたわけであり、またそれに続き同様の決定をする地域が現れたのであるが、それゆえに「私の関心は、どのようにして本書がそのような地位を得たのかを調査することだった。そしてその地位をうまく手に入れるのにどのような理由が必要だったのかを調べることだった」（77）と述べている。じつはカリキュラムのキャノンとしての不動の地位を「うまく手に入れ」た理由にこそ、本人種主義論争の背景があると言ってよい。すなわち、第2次世界大戦後の1940年代末にアメリカ文学のキャノンが定義されたとき、『ハックルベリー・フィンの冒険』がキャノン中のキャノンとして、つまりアラックの言う「ハイパーキャノン」（超キャノンないしはキャノンの極地）としてその最高位を賦与されたことがそれである。1885年に既成の文化に対抗して登場したこの作品が、どのようなプロセスを経て、またどのような基準においてキャノン中のキャノンに編成されていくのか、それ自体まことに興味深い問題であるが、そしてまたアラックの本領はそのキャノン編成の政治学を解き明かすことにあるのだが、本稿では割愛せざるを得ない。

先を急げば、キャノン化の過程は必然的に教育活動を伴う。ハイパーキャノン化ともなれば、「かつてやったことのない方法によって、その価値評価の仕方を学生たちに教育することを伴」（6）うのである。こうしてアメリカ文学を代表する本作品が、いかに偉大な傑作であるかを教えることが始まった。時おりしもニュー・クリティシズムの全盛期であり、新批評が強調した緻密な分析を作品に加えることによって大量の研究が進められ、その対象作品として、本書は学問研究と批評活動の中心に置かれた。第19章のミシシッピ川の夜明けの美しい描写や、第31章でのハックの内面の葛藤の場面が、綿密に分析され、教えられた。1940年代末より本書は、大学のテキストとして、また高等学校や小中学校の教材として、あまねく採用されるようになった。例えば1980 - 90年代の大学用テキストのアメリカ文学主要アンソロジーを見ても、破格の取り扱いがなされており、作品の全編を完璧に収録するスペースが与えられたり、別冊として作品そのものが付されたりしている。<sup>7</sup> 高校においてもまた同様に、約4分の3校にあたる学校で本書が必修にされ、シェイクスピアよりも、その他のどの小説やその他のどのアメリカ文学の作品よりも数多く教えられている。中学校や小学校においては、本書の幼少年版を用いた教材で教えられる。

学校の教材であることとも直接関わり、本書は今日もおアメリカ古典文学中のベストセラーを

維持している。その数を正確に示すのは難しいものの、出版以来合衆国だけでも153種以上の版を重ね、現在でもノートン、ホートン・ミフリン、ボズ・メリルおよびマクミランの4社あわせた売り上げ部数が毎年およそ3万部以上、またロングマンの幼少年版が毎年約9千部、同じくペンギンの幼少年版が毎年約5万部以上にもなるというから、合計すればそれは毎年8万9千部に達する。これらの数字は決して網羅的なものとはいえないものの、それは『ハックルベリー・フィンの冒険』がなおベストセラーであることを十分示している。合衆国外も含めた世界における累積出版部数は、おそらく2万部を超えるであろうという。<sup>8</sup>

このようにして教えられることによって、『ハックルベリー・フィンの冒険』が大勢のアメリカ人の想像力の中に生き続け、彼らの共通意識にまでなっていることは想像に難くない。<sup>9</sup> しかしながら、本論争によって顕わになったのは、多くの黒人読者がその「大勢のアメリカ人」の中に含まれていなかったことである。白人の少年たちはこのテキストを学校で読んで作中のヒーローに容易に同化し気分が高揚するのに対し、黒人の生徒たちは心を傷つけられ苦痛を覚える。人種統合がなされた後の学校教育現場で生じたこの深刻な問題に、今日のアメリカ社会は対応を迫られているのである。本書が直面している人種主義論争の影響力の大きさと問題の深刻さは、この作品が、アメリカ文学のキャノンとして特権的な地位を得てきたことや、その直接の影響のもとに、学校カリキュラムの中に必修教科書として不動の地位を占めてきたことなどと非常に深く関わっている点を改めて確認しておきたい。

アラックによれば、黒人の父母たちの異議申し立ては、必修教科書である本書の揺るがぬ地位に対する異議である。「必修教科書としての『ハック』の地位に異議を申し立てたとしても、憲法修正第1条[言論・出版の自由は、これを侵すことができない=引用者]を何ら脅かすものではない」(viii)。したがって、彼は、黒人生徒の父母たちのこの異議申し立てに真摯に耳を傾けるべきであるという立場をとる。<sup>10</sup>

しかし半世紀近くにおよぶ本人種主義論争の経緯をみると、必ずしもそのような方向に進展してきたとは言えないようである。どうやら本論争にあっては、必修教科書としての該当作品への異議申し立てに耳を傾けるというよりは、この傑作を理解できぬ者はお粗末な読者であると言わんばかりに対抗的に応答し、もっぱら作品擁護を強弁するような傾向になっているのではないかとアラックは警告しているのであろう。黒人の父母が本書に対し異議申し立てをすると、必ずきまってこの本を擁護する応酬が返ってくる。このような構図をとる論争こそお粗末ではないのか、とアラックは思う。とりわけ、本作品を擁護するメディアの過度の反応を「偶像崇拜“idolatry”」と呼び、それに対しては闘わねばならぬという姿勢を示す。<sup>11</sup> 彼は、『ハックルベリー・フィン』という「すぐれた、価値のある本“an excellent and important book”」(vii)についての論争に、もっと公平で、<sup>ディスカッション</sup>もっとまともな「議論」を望んでいる。

言うまでもなく、本人種主義論争上重要なこととして、ニューヨーク市教育委員会による先述の

公式決定の背景には、黒人の声がようやく顕在化する時代を迎えたアメリカ合衆国の歴史の展開があることを忘れてはならない。公民権運動の高まりがなければ、黒人生徒の父母によるこの異議申し立ての声が、ここまで取り上げられることはなかったであろう。「それはまさに人種の平等が、支配文化によって高位の価値観に位置づけられた時期である。」<sup>12</sup>そしてまことに皮肉なことだが、その時期とは、『ハックルベリー・フィンの冒険』がキャンノンとしての高い地位を確立せんとしていた時期であり、まさしくこの時、本書は黒人生徒の父母から異議申し立てを受け始めたのであった。

『ハックルベリー・フィン』は、公民権意識のアイコンとしても非常に効果的な役割を果たすことができるので超<sup>ハイパー</sup>キャンノン化を達成し始めたのであるが、それを達成し始めるやいなや黒人から学校教育における異議申し立てを受けることになった。この本が彼らのために寄与していると思われていたにもかかわらず、まさにその黒人からの異議申し立てであった。(9)

一方これと同じ時期に、公民権運動に抵抗する白人の動きが表面化したことも確認しておかねばならない。1957年9月、本論争のきっかけとなったニューヨーク市教育委員会の先述の決定とちょうど同じ年9月、アーカンソー州の州都リトル・ロックでは、南部白人がセントラル高校への黒人生徒9人の入学を拒否して実力行使に及んだため、アイゼンハワー大統領が、南北戦争再建期以後はじめてとなる連邦軍を南部へ派遣するという事態になった。『ハックルベリー・フィンの冒険』をめぐる本人種主義論争は、人種統合をめぐるアメリカ社会の現実の攻防と直接絡み合いながら展開しているといえるだろう。

## 2 黒人描写の両義性に対する再解釈

本人種主義論争が続く中、作品中の黒人描写に大きな関心が払われるようになり、主要人物であるジムの描写をめぐって多くの批評がなされるようになったのは当然のことであろう。本作品に異議申し立てをする側の指摘をあげれば、つぎの2点になる。(1)作中頻繁に用いられる言葉「ニガー」は人種主義的な表現であり、黒人を傷つける。(2)逃亡奴隷のジムが演じる minstrel 劇のステレオタイプは、今日の社会になお存在する黒人ステレオタイプと重なり、痛ましい黒人像である。とりわけ結末における笑劇<sup>ファース</sup>への脱線行為の中では、その点が顕著である (Fishkin, “Racial Attitudes” 611)。これに対し、本作品を擁護する側はつぎのように対応する。(1)「ニガー」という用語は、当時一般に使われていた言葉である。人種主義者を風刺しようとするならば、まずそのありのままを示す必要がある。(2)たしかにジムの描写には minstrel 劇の仮面が使われている。しかしラルフ・エリソンが指摘しているとおり、作品にはその仮面の背後のジムの人間性や複雑さもまた描かれている。結末の笑劇に関しては、アメリカ史が現実に出た1880年代の歴史を思い返せばよい。トウェ

インがこの作品を執筆していた時期に南部で動き出した人種隔離の策動、つまりアメリカ史の揺れ戻しという脈絡の中で読むことによって、結末の笑劇は「アメリカ文化そのものがアメリカの黒人に対する自由と平等の理念を笑劇にしたやり方を映し出している」<sup>13</sup>と理解できるのである。

作品を擁護する側が依拠した黒人像の解釈は、早くからジムの描写の複雑さに気づいていたラルフ・エリソンが指摘する批評史上重要な以下の洞察（1958）である。

トウェインが本書を執筆したのは戦争が終結を迎えて間もない時期、すなわちそれは顔を黒めりした minstrel 劇がいまだ人気を博していた時期であり、かつまた黒人をめぐる諸問題が、奴隷制廃止論者も嫌気がさしてしまうような状態に据え置かれたままの時期であったが、彼はジムの minstrel 劇の伝統の枠組みの中にはめ込んだ。私たちがジムの威厳と人間味あふれる能力　さらにはトウェインの複雑さ　を見るのは、このステレオタイプの仮面<sup>マスク</sup>の背後においてである。（Ellison 421 - 22）

しかしながら本論争が激しくなった1980年代のジムの描写に関する批評の多くは、ジムの minstrel 劇の枠組みの中にはめ込んで解釈するものであり、エリソンが認めた仮面の背後に現れるジムの威厳や人間味を無視する傾向を示していた。それらの批評は、ジムの描写が minstrel 劇の伝統の中の卑屈な黒人像に合致するとして、本作品を批判した。『マーク・トウェイン・ジャーナル』（1984）誌上のフレデリック・ウダードならびにドナアリ・マッキャン共著「minstrel 劇による束縛と19世紀の寛容　『ハックルベリー・フィン』の場合」や、『アメリカン・スタディーズ』（1986）誌上のアンソニー・ベレット著「『ハックルベリー・フィン』と minstrel 劇」他がこの中に入る。

ジムの威厳を読み取る点でエリソンに続き、その解釈を早くも1980年代半ばに発展させたのが、デーヴィッド・ライオネル・スミス（1984）、ジェイムズ・M・コックス（1985）およびフォレスト・G・ロビンソン（1988）たちであった。彼らは黒人描写の両義性を見事に分析し、その緻密な読みを具体的に提示したのである。本人種主義論争の中でこの成果がもたらされたこと自体、きわめて興味深いことである。綿密な細部の読みによって複雑なジムの性格を読み解くことは、後述するとおり、黒人奴隷の人格の両義性を読み解くことであり、かつまたそれはトウェインの複雑さやその洞察力を解読することでもある。

スミスの論文「ハック、ジムおよびアメリカにおける人種言説」では、トウェインが人種主義を覆す戦略を使っている点を論じる（Smith 105）。作品の第2章でほら話をするジムの描写は、それまでは minstrel 劇を暗示する事例として、迷信深く、かつ騙されやすい黒人という解釈がなされていた。しかしスミスは、ジムがトムをいたづらを見抜き、それを逆手にとってほら話をする点に、彼の創造性と快活さを読むのである。コックスもまた彼の論文の中でこの場面を挙げ、ほら話の名手としてのジムを読み取っている。コックスに言わせれば、ジムが眠っている証拠はない（Cox

391)。<sup>14</sup>

「受け入れ難い本」(1985)の中でコックスが指摘するジムの性格の肝要な点とは、ジムの聡明さであり、抜け目のなさである。ジムとハックの関係が、愛情とか友情とかで結ばれているという見解には修正が加えられねばならないとして、コックスは二人のかかわりに現れるお互いの抜け目のなさ、聡明さを分析する。ジムがハックに嘘をつき、ハックの父親の死を知らせないのも、ジムの抜け目のなさを例証するものである。それはひとつにはジムの優しさであり、大人の子供へのやりわりでもある。が、もうひとつには、自分の利益のためにそれを知らせないのである。自分が逃亡を続けるためにどうしてもハックを必要とするジムは、父親の死によって自由になるハックがジムの元を立ち去ってしまうかもしれないことを危惧するゆえに、嘘について自分の身を守るのである。我われは、ハックが嘘をつくことを認めているし、その点を評価もしているが、ジムがハックの父親の死についてハックに嘘をつくことを見落としがちである(Cox 391)。他にもコックスはジムの知性が示される場面をあげ、ジムの聡明さを例証している。

上記コックスの論文を、それが収録された記念論文集中最も面白く読んだというロビンソンは、『ハックルベリー・フィン』におけるジムの性格描写」(1986)の演題で講演し、「ジムは奴隷制南部にあってステレオタイプを演じている、それも聡明に演じている」と論じた。<sup>15</sup>「ジムは生き延びるためにやらなければならないことをする。彼はありとあらゆる騙しの手段に訴えるのである。 minstrel 劇のステレオタイプである騙されやすい黒人を、彼自身の有利になるように利用するジムは、「この偽りのアイデンティティー」が「白人の残虐さと背信に対する最良の防御」になるかもしれないと知っているのである。

黒人奴隷の性格に関するこのような両義性は、ジョージ・ローウィックの『日没から夜明けまで』(1972)が伝える奴隷の実態に符合する。この記録は、1930年代のニューディール政策による連邦作家計画で収録された元奴隷のナラティブ資料であるが、それを編集・刊行したローウィックは、その第6章で抵抗する奴隷の姿をありありと伝えている。奴隷制社会の底辺に生きる彼らではあるが、奴隷は「全面的には支配されなかった」こと、「あらゆる利用可能な手段によって絶えず闘争しながら抵抗した」こと、「彼ら自身が完全な犠牲者とならないために抑圧者と戦い、また、そうすることによって自らの人間性を創造した」こと、および抑圧と戦いながら、また、語り継がれた民話の中のトリックスターの活躍などから学びながら「その周囲の環境によって否定されていたあの必要な自信を」自己の現在の状況から創出したこと等々が、元奴隷だった彼ら自身の言葉によるナラティブで明らかにされる。それをローウィックはつぎのように分析している。

「われわれは、奴隷の人格を相反する両義性を持つものと考えなければならない。すなわち、一方で奴隷にふさわしい従順さと分別をもちながら、他方では少なくとも動産奴隷制から人格をまもり、奴隷状態の改善と究極の解放において現実的成果をもたらすさまざまな形で多くの怒りが存在した。」(Rawick 95、西川



進訳)

「奴隷は、サンボになる傾向をもたないがぎり、決してナット・ターナーになることはできない。……まったくのサンボであるか、あるいは純然たる反乱者であるかの議論は、単なる架空の抽象論であって、生きた人間の行動を具体的に理解するのに役立たない。われわれは、奴隷の反抗的人格の矛盾する性格を理解することなしには、決してその現実を生き生きと描写することはできない。」(同上 95 - 96)

「説話や民話の中で、奴隷は、ただ彼の願望を演じているだけでなく、それ以上のずっと多くのことをなし遂げているのである。アナンシ [トリックスターとしての蜘蛛 = 引用者] や兎どんの手柄話に笑い興じている中に、あまりに多くのその周囲の環境によって否定されていたあの必要な自信を、彼自身の現在の状況から自分で創出したのである。アナンシ - 兎ドンは、サンボであると同時にナット・ターナーであり、犠牲者であるとともに革命家である。両者は首尾よく自己とその人間性を主張し、内面的被害者意識、つまり、彼の客観的状況の及ぼす精神的影響を克服していくのである。」(同上 100)

上記のようなローウィックの分析を、『ハックルベリー・フィンの冒険』の中の逃亡奴隷ジムの姿を思い起こしながら読んでみると、相反する両義性を持つ複雑な性格に描かれているジムの理解を助けてくれる。筏の上でハックを諭す父のようなジムの姿は、すでに自らの人格を守り、自信を身につけた大人としての存在である。そうすると、結末の笑劇中で minstrel 劇の仮面を被って振舞うジムの行為は、上記ローウィックの元奴隷のナラティブが示すように、白人がそれを要求するためにとる行為であり「偽りのアイデンティティー」であって、その仮面の背後に自己を覆い隠しているという読みが可能になる。

1990年代になると、以上のような黒人像の読みを、シェリー・フィッシャー・フィッシュキン、ジョスリン・チャドウィック、エモリー・エリオット、ラルフ・ワイリー、デーヴィッド・ブラッドリーおよびジム・ミラーなどが支持し、作中ジムは、意識的にまた戦略的に minstrel 劇の仮面を被るのであると読む。ジムは自己の利益のためにそれを演じるのである、と。

黒人描写に関して以上のような読みの段階に達した時点から、改めて1980年代に多く見られた「minstrel 劇としての黒人」評を振り返り、そこに PC 論者の行き過ぎはなかつただろうかとフィッシュキンは問うている。人種主義を廃止するあっぱれな事業の一環として、minstrel 劇で演じられるようなジムの姿を見つけたらいつでもそれを非難することが批評上の進歩的な行為であり、「正しいと認められた政治的信条から見て妥当な (Politically Correct) 手段」であると確信していたのではないかというのである。フィッシュキンは、仮面の背後にある黒人の人間性を読み取れない解釈は、解釈作業においてなお人種主義を克服できていない批評家のものであると指摘する (Fishkin, "Twain and Race" 142)。

1990年に発見された『ハックルベリー・フィンの冒険』の手書き原稿前半部分を検討したヴィクター・ドイノは、ジムの黒人訛りと知性とに対するトウェインの傾注が入念で一貫していることや、

トウェインがますますジムに惹かれていくさまをそこに読み取り、それをランダムハウス版『ハックルベリー・フィンの冒険』(1996)の「テキスト補遺」の中で報告している(367)。トウェインはジムの使う黒人訛りについて、その音声表記の細部にいたるまでこだわっており、音の響きを伝えるべく工夫を凝らしているのである。その様は、手書き原稿への書き込みから見て取れる。黒人を重要な人物として設定しただけでなく、その描写に情熱を傾けている様がそこから十分想像できる。トウェインは仮面の背後に隠されたジムの知性を洞察しながら、黒人奴隷の人格の複雑な実像に迫ろうとしたのであり、相反する両義性をもつ奴隷の人格の写実描写において、一面的な黒人描写を脱したのである。この点にこそ、作家としてのトウェインのきわめて大きな意義がある。

しかし一方、トウェインはオハイオ川の河口からジムを自由の地へと向かわせはしなかった。もちろん彼は、夜陰にまぎれて逃亡を決行するジムの恐怖感や飢え、北への起点となるケアロが近づいたときの興奮、および自由獲得後の夢は描く。だが、それ以上には逃亡奴隷の「自由の追求」を描いていない。それを描こうにも、自由の地とは逆の深南部ディープ・サウスに向かう物語の設定では、そもそもその枠組みからしてそれが叶わない構造になっている。しかもその方向、その枠組みを選んだのは、他でもないトウェイン自身なのである。単に彼がオハイオ川を知らないからというだけではない。トウェインは南部を描くことに固執したのであった。<sup>16</sup> ローウィックが上掲書で示したとおり、黒人コミュニティの手助けなしに逃亡奴隷が逃げ遂げるのは至難の業であることを考慮するならば、この物語の枠組みではジムの人間性が表に現れようがない。周囲は深南部奴隷制社会である。ハックには、彼の成長にとって欠かせないジムという「助っ人」がいるのだが、ジムにはハック以上の「助っ人」がいない。そのような中で、ジムが子供たちに対する父親のやさしい愛情を示したり、またハックに対してほんとうの友達とはどういう人間かを論じたりするのは、対岸の奴隷制社会から隔離された夜のミシシッピ川の筏の上においてである。そのジムは、ミス・ワトソンの遺言で解放されていたにもかかわらず、それを知らされぬまま物語結末で再び奴隷状態に置かれ、ミンストレル劇を演じざるをえなくなっている。しかも第31章でついにハックがジムを救う決心をした後に、それが展開するのである。

なぜ結末に笑劇を設定し、解放された奴隷を再び「奴隷」にしてみせる残酷な遊びを描いたのか。この結末に対する批判的な見解はヘミングウェイの指摘(*Green Hills of Africa*, 1935)やレオ・マークスの論文(“Mr. Eliot, Mr. Trilling, and *Huckleberry Finn*,”1953)で有名であるが、現行結末を如何に解釈するかにおいては、ルイス・バッドの見解のように、トウェインが執筆した1880年代の合衆国南部の実態や作者の執筆姿勢という生きたコンテクストを無視するわけにはいかないだろう。<sup>17</sup>

バッドによれば、トウェインが本作品を執筆していた当時の合衆国にあっては、再建後の南部現地報告に時事的な意味合いがあった。また、時事問題に特に関心の強かったトウェインが、国家的に重要な南部再建問題に無関心であったとは考え難い。物語の舞台を南北戦争以前の1835 - 45年ころに設定した作品を、トウェインは南北戦争後の1876 - 84年に、さらに言えば主に再建期後に執筆

した。長い執筆の期間に何度か中断し、その間の1882年に彼はミシシッピ川流域の懐かしい南部を再訪している。本作品を脱稿したのは、南部再訪直後である。ミシシッピ川流域地方の再訪とその時の旅行記であり南部視察報告でもある『ミシシッピ川的生活』（1883）後半部分の執筆が契機となって完成した本書には、とりわけ作品後半部分に当時の南部の現状が色濃く映し出されている。<sup>18</sup>

奴隷制復活を思わせる人種隔離諸法の策定前夜に南部を再訪したトウェインが、そのとき執筆中であった本書に（ジムを再奴隷状態に置くことをとおして）その時代を意識的に含意させたと考えても何ら不思議はないだろう。逆に、19世紀のコンテクストなしに本作品を理解するには困難を伴うかもしれない。小中学校の教室で使用する場合には、当然、その点を考慮する必要性が生まれてこよう。

### 3 19世紀の白人作家が描写した黒人像への不満

以上見てきたとおり、『ハックルベリー・フィンの冒険』をめぐる合衆国での人種主義論争の過程で、その黒人像の受容に大きな変化が生まれた。それによって minstrel 劇の仮面の後ろに、トウェインの描いたジムの複雑な人格が見えるようになり、ジムの威厳や知性を読み取り、ジムがサンボを演じるのは生き延びるためであると理解することが可能になった。しかしそれによってもなお、今日、[ 必修教科書として本作品を学校で読む ] 黒人生徒たちの痛みが和らぐわけではない。

20世紀アメリカの黒人女性作家トニ・モリソンは、作中の黒人描写に満足することができない。モリソンは、『白さと想像力 アメリカ文学の黒人像』（1992）の中で、トウェインの描いた仮面の背後の黒人（ジム）の人格は、いまだ「他者」のままにとどまっていると指摘する。なぜならば、「黒人が白人の友人や主人に対して見たところ無限の愛と共感を抱いているように思える」からであり、「ジムは迫害者が自分を苦しみ屈辱を与えるのを許し、その苦痛と屈辱に無限の愛で応えているからである。19世紀の白人作家であるトウェインのこのような描写は、モリソンを驚かせる。白人がどのような対応をしても黒人は許してくれるのだという「許しと愛に対する白人の憧れ」としてこれを読むことはできても、それが仮面の背後の黒人の真の人格であるとしては読めない。「この憧れはジムが自分の劣等性を認めて（奴隷としてではなく、黒人として）それを軽蔑する場合にしか可能でない」と、モリソンは厳しい指摘をする。

「この小説では二つのことがわたしたちを驚かせる。つまり黒人が白人の友人や主人に対して見たところ無限の愛と共感を抱いているように思えることと、白人は自ら言う通り、すぐれていて、立派な大人なのだと黒人が信じこんでいること、である。このように、ジムをはっきり目に見える他者として描いているのは、許しと愛に対する白人の憧れとして読むことができる。しかし、この憧れはジムが自分の劣等性を認めて（奴隷としてではなく、黒人として）それを軽蔑する場合にしか可能でない。ジムは迫害者が自分を苦しみ屈辱を与えるのを許し、その苦痛と屈辱に無限の愛で応える。ハックとトムがジムに与える屈辱は奇怪で、果

てしがなく、ばかげていて、氣力をそぐもので、おまけに、わたしたちが、ジムを成熟した愛情深い父親、感受性の鋭い男として知ったあとで起こるのだ。」(Morrison 56 - 57、大社淑子訳)

「アメリカの(あるいは「世界」の)小説としての『ハックルベリー・フィン』の偉大さ、もしくはほぼ偉大であることをめぐる論争が論争として存在するのは、その論争が、奴隷制と自由の関係、ハックの成長とそこで果たされるジムの役割、そしてマーク・トウェインがさらに物語を続けて、自由の地への旅を探求することができなかった事実についてさえ、精細な調査をしていないからだ。」(同上 55)

「この小説の枠組みを考えると、アメリカでは、ジムなしにハックが成長して道徳的な人間になる方法はない、ということだ。ジムを自由にすること、彼にオハイオ川の河口から自由の地へ向かわせることは、この作品の前提をすべて放棄することになる。ハックもマーク・トウェインも、想像の中ですら、自由を得たジムを容認できないのだ。そんなことになれば、ジムに対するせっかくのひいきが根元から吹き飛んでしまうだろう。」(同上 56)

モリソンの批評は、トウェインのこのテキストを、たとえ19世紀の歴史のコンテキストに置いて読むとしてもなお、仮面の背後の黒人の人格描写において他者性を脱していないと読むものだろう。モリソンの読みは、本作品を読む今日の黒人読者の多くが、どのように傷つくかを説明するものになっているのではないか。19世紀の白人作家トウェインには、黒人に接する姿勢として、黒人の能力や尊厳を十分認めているつもりでも、そこには「許しと愛に対する白人の憧れ」や独りよがり、つまりは奴隷所有者階級の息子としての名残りが、あるいは残存しているのかもしれない。

アラックにとって本書をめぐるこの問題は、「われわれ[アメリカ人]が人種問題についてどのように考えるのか、またアメリカ合衆国をどのように理解するのかという重要な問題」と直結している。彼は市民としてまた学者としてこの人種主義論争に関心を持ち続け、本書をめぐる論争の背景と現状を分析し、きわめて学問的かつ批判的な論争の書を公刊した。もとより彼は、『ハックルベリー・フィンの冒険』を「人種主義の書」であるとか、「非アメリカ的な本」であると主張するのではない。彼は、「トウェインの本がどのようにして アメリカ性 や 反人種主義の書 としたの価値を賦与され、またそれによってどのような影響 / 効果を賦与されるようになったか(vii)を考察するのである。本作品を「反人種主義の書」として高くまつりあげてしまえば、つまりハックとジムが聖なる共同体(Lionel Trilling)を形成し、筏の上でカラー・ラインを越えたと宣言して二人の関係を理想化してしまえば、アメリカ人は、本書が執筆された1880年代に、白人と黒人に関するどのような問題も精神的にすでに解決済みであるとしてしまいかねず、現実のアメリカ社会に存在する人種差別から目をそむけることになる、それは白人の独りよがりというものだ(8)と論じるのである。

TLS (Times Literary Supplement) 紙に寄稿したある学者の誤解を指摘した上で、アラックは、その論考(1993)の結語に関しては文字通りに受け止め、それを支持している。すなわち「『ハック』

が古典であるのは、それが支配文化によって確立された永遠の価値を体現しているからではなく、それがつねに再解釈へといざなってくれるからである」(14)。本書をめぐる議論は続けたらいい、本書がいざなう再解釈を生み出していけばいい、本書はそれに十分耐えうる作品である、と述べているのであろう。黒人生徒の父母たちから提起された本件の異議申し立てもまた『ハックルベリー・フィンの冒険』の再解釈を促し、それを迫ったのである。

民主主義を掲げるアメリカ合衆国で人種差別がなぜいまだ解決されないのか。合衆国の人種主義に抗する戦いは、1880年代よりも、1950年代よりも、そして1980年代よりもさらに先へと進める必要があるだろう。人種をめくりこれまでも、それぞれの時代にそれぞれの段階の闘いを続けてきた合衆国である。『ハックルベリー・フィンの冒険』は、マーク・トウェインが100年以上も前に執筆した作品であるが、今日の人種問題を考える題材として、その論争を引き受けている。

## 注

- 1 奇妙なことではあるが、ニューヨーク市教育委員会は、この決定を下すのに何ら外的圧力は無かったと表明している (Henry 26)。
- 2 主人公である語り手のハックは、今日の差別語である“ニガー”を作品中200回以上も使用する。この言葉は不快であると、デーヴィッド・ブラッドリーもこの点ではそれを認めている。「“ニガー”が不快なのは、それを1845年の登場人物が使うからではなく、文字通り1995年のアメリカ人が使うという意味になるからである」(David Bradley cited in Arac 85)。
- 3 ただし高等学校で本書を教えることや、それを学校図書館用に購入することはできた。
- 4 1984 - 85年に本作品は出版100周年記念を迎え、トウェインの故郷ミズーリ州ハンニバルやコネティカット州ハートフォードを中心に、各地で華やかな祝賀行事や講演会、シンポジウム、展示会、論文集の発行などが取り組まれた。まさに、本作品を称賛する声と告発する声とが対立・併存し、その姿が明瞭な形になって現れた。ジョナサン・アラックの著書のタイトル *Huckleberry Finn As Idol and Target* はこのことを表している。
- 5 *Born to Trouble : Adventures of Huckleberry Finn*, produced for PBS, and broadcast on January 26, 2000. さらに2002年には、1月14、15日の2夜、やはりPBS放送によって、ケン・バーンズのドキュメンタリー映画『マーク・トウェイン』が全米放映された。トウェインを讃えるこの番組は、多文化主義の時代にふさわしい視点から、人種主義や帝国主義に批判的であったこの作家を強く印象づけるものであった。映画の中に、本人種主義論争への直接の言及は何もないものの、まさにこの論争の最中に、トウェインを讃えるドキュメンタリー映画が新しいトウェイン像を携えて前景化されたということになる。石原剛によれば、じつに1,200万人もの視聴者を獲得したという (石原「ケン・バーンズの『マーク・トウェイン』」、75)。
- 6 以下、アラックの本研究書からの引用は( )内の数字でそのページ数を示す。
- 7 Arac 6 - 7.例えば *The Harper American Literature*, 2 vols (1987) や *Heath Anthology of American Literature*, 2 vols (1990). 高校の実態に関してアラックは Arthur Applebee, “Stability and Change in the High School Canon.”

*English Journal* 81 5 (1992) を引用している。

- 8 Gerber 2 - 4 . 今日、本書は、カリキュラムからの除外要望とぶつかり合っているために、おそらくはかつてほどではないだろうと断りながらも、ガーバーは、本書がアメリカの小中学校や高校の教科書としてどのように教えられ、また大学の文学コースのテキストとしていかに取り上げられているかの状況を報告している。たとえば、小学校5年生になると教師が本作品からいくつかの場面を選んで朗読するか、幼少年版を課題図書に課す。中学校では9年生の終わりまでに、この作品がおもしろい冒険物語であり、『トム・ソーヤーの冒険』の姉妹編であると紹介される。高校生段階では、アメリカ文学のクラスでほとんどの生徒がアンソロジーの中の抜粋を読む。大学段階ではよく読まれている。大学入学前に約半数が読んでいるし、ひとたび大学に入ると学部生ではつぎのような科目で必読テキストとなる。すなわち、「文学入門」、「作品講読」、「アメリカ文学概論」、「アメリカ小説」、「19世紀アメリカ文学」および「リアリズム文学の勃興」等の科目である。
- 9 「ハックルベリー・フィン」は、アメリカ文学の中で最も典型的なアメリカの少年像であるだけでなく、アメリカの読者 白人読者 が心のいちばん深いところで自己投影した登場人物である」と記す *New York Times* (25 July 1992) 紙へのローレンス・ハウの手紙がそれをよく示している (Lawrence Howe cited in Arac 3)。
- 10 アラックが引用する以下のレオ・マークスの意見は、おそらくアラックのものと重なるのであろう。「アメリカの偉大な本であるからという理由で、それ[『ハック』]を必読書にすべきだという主張には説得力がない。我われはたいていの偉大な本を必ずしも必読書にしているわけではない」(Leo Marx cited in Arac 13)。
- 11 この偶像崇拜こそ、アラックの命名した「ハイパーキャノン」の副産物なのである (Arac 9)。
- 12 Arac 15 . 公民権運動がもっとも活発だった時期は1954 - 65年の期間。1954年にはブラウン判決 (合衆国最高裁判所による人種分離教育違憲判決) が出され、公立学校における人種隔離教育が違憲となった。翌1955年の最高裁判決は、可及的速やかに共学制度に移行せよと命じた。
- 13 Fishkin, "Racial Attitudes" 611 . 南北戦争後のこの時期、反動的な動きとして「クー・クラックス・クラン」や白樺騎士団のような組織が結成された。1870年までに元反乱州のすべてが合衆国に復帰し、1876年にもなると大勢のアフリカ系アメリカ人は、合法的ならびに非合法的方法によって、徐々に参政権を剥奪されていった (Stephen Matterson, *American Literature : The Essential Glossary* [London : Arnold, 2003] 185) 。1877年に、残留していた連邦軍が南部から撤退し、再建期は正式に終わる。
- 14 さらに補足として、話の名手としてのジムを描写した事例を本稿執筆者から追加すると、1990年に新たに発見された手書き原稿中の「解剖用死体置き場の挿話 "the Cadaver Episode"」に、話術の巧みなジムを読み取ることができる ( *Huckleberry Finn* [Random House , 1996] 62 - 65 . 参照 : 拙稿「『ハック』の手書き原稿」) 。
- 15 1986年11月14日、立教大学公開講演会。出版までもない記念論文集『ハックルベリー・フィンの100年』(1985) についてコメントを求めた本稿執筆者に対し、一番面白かったのがコックスの論文だったと話してくれた。コックスの歴史観とは異なるものの、ロビンソンはコックスの読みに啓発されたのか、あるいは自身もすでにそのように読み始めていたのか、講演内容は後日、同名のタイトルで『19世紀文学』(1988) 誌に公刊さ

れた。

16 参照：拙稿「深南部に向かう筏」および「深南部に向かう筏を再考する」。

17 Budd, “Scalawag” in *Social Philosopher*, 86 - 110 . 参照：拙稿「深南部に向かう筏」。

18 See Igawa, “Mark Twain’s Revisiting of the Mississippi River,” 157 - 70 .

## 参考文献

Arac, Jonathan. *Huckleberry Finn As Idol and Target: The Functions of Criticism in Our Time*. Madison : The University of Wisconsin Press , 1997 .

*Born to Trouble : Adventures of Huckleberry Finn*. Videocassette. Culture Shock. PBS . 26 Jan . 2000 .

Budd, Louis J. *Mark Twain : Social Philosopher* . 1962 . Columbia, Missouri : University of Missouri Press , 2001 .

Burns, Ken, dir. *Mark Twain*. Videocassette. Writ. Dayton Duncan and Geoffrey C. Ward. Florentine Films. PBS . 2002 .

Berret, Anthony J. “*Huckleberry Finn* and the Minstrel Show,” *American Studies* 27 2 ( 1986 ): 37 - 48 .

*Huck Finn in Context : A Teaching Guide*. A Companion Guide to “Born to Trouble : *Adventures of Huckleberry Finn*.” One of Four Films of the CULTURE SHOCK Series Premieres January 2000 . Boston : WGBH Educational Foundation , 2000 .

Cox, James M. “A Hard Book to Take.” *One Hundred Years of Huckleberry Finn*. Eds. Sattelmeyer and J. Donald Crowley . 386 - 403 .

Davis, Thadious, James S. Leonard, and Thomas A. Tenney, eds. *Satire or Evasion? : Black Perspectives on Huckleberry Finn*. Durham, N.C. : Duke University Press , 1991 .

Doyno, Victor. Foreword to the Text. *Huckleberry Finn*. Random House , 1996 . iii-xvii.

. “Textual Addendum.” *Huckleberry Finn*. Random House , 1996 . 365 - 88 .

Ellison, Ralf. “Change the Joke and Slip the Yoke.” *Partisan Review* XXV 2 ( 1958 ): 212 - 22 . Rpt. in *Adventures of Huckleberry Finn*. Norton Critical Edition. Eds. Sculley Bradley, et al. New York : Norton , 1977 . 421 - 22 .

Fishkin, Shelley Fisher, “Mark Twain and Race.” *A Historical Guide to Mark Twain*. Ed. Shelley Fisher Fishkin. New York : Oxford University Press , 2002 . 127 - 62 .

. “Racial Attitudes.” *The Mark Twain Encyclopedia*. Eds. J.R. LeMaster and James D. Wilson. New York : Garland Publishing , 1993 . 609 - 15 .

Gerber, John. Introduction. *One Hundred Years of Huckleberry Finn*. Eds. Sattelmeyer and Crowley . 1 - 12 .

Henry, Peaches. “The Struggle for Tolerance : Race and Censorship in *Huckleberry Finn*.” *Satire or Evasion?* Eds. Leonard, Tenney and Davis . 25 - 48 .

- Igawa, Masago. "Mark Twain's Revisiting of the Mississippi River and *Adventures of Huckleberry Finn*." *Proceedings of the Kyoto American Studies Summer Seminar, Specialists Conference 1986*. 157 - 70 .
- Kaplan, Justin. "Born to Trouble : One Hundred Years of *Huckleberry Finn*." Washington : Library of Congress , 1985 .
- . *Mr. Clemens and Mark Twain*. New York : Simon & Schuster , 1966 .
- Leonard, James S., ed. *Making Mark Twain Work in the Classroom*. Durham : Duke University Press , 1999 .
- Leonard, James S., Thomas A. Tenney, and Thadious M. Davis, eds. *Satire or Evasion? : Black Perspectives on Huckleberry Finn*. Durham : Duke University Press , 1992 .
- Marx, Leo. "Mr. Eliot, Mr. Trilling, and *Huckleberry Finn*." *The American Scholar* 22 4 ( 1953 ) : 423 - 40 .
- Rpt. in *Adventures of Huckleberry Finn*. Norton Critical Edition. Eds. Sculley Bradley, et al. New York : Norton , 1977 . 336 - 49 .
- Morrison, Toni. *Playing in the Dark : Whiteness and the Literary Imagination* . 1992 . London : Picador , 1993 . 大社淑子訳 『白さと想像力 アメリカ文学の黒人像』( 朝日新聞社 1994 ) .
- Rawick, George P. *From Sundown to Sunup : The Making of the Black Community*. The American Slave : A Composite Autobiography 1 . Westport, Conn. : Greenwood , 1972 . 西川進訳 『日没から夜明けまで』( 刀水書房 1986 ) .
- Robinson, Forrest G. "The Characterization of Jim in *Huckleberry Finn*." *Nineteenth-Century Literature* 43 3( 1988 ) : 361 - 91 .
- Roediger, David R. *The Wages of Whiteness : Race and the Making of the American Working Class*. Rev. ed. New York : Verso , 1999 .
- Sattelmeyer, Robert and J. Donald Crowley, eds. *One Hundred Years of Huckleberry Finn : The Boy, His Book, and American Culture*. Columbia : University of Missouri Press , 1985 .
- Smith, David L. "Huck, Jim, and American Racial Discourse." Leonard, et al, eds. *Satire or Evasion?* 103 - 20 .
- Trilling, Lionel. Introduction. *Adventures of Huckleberry Finn*. New York : Rinehart , 1948 . Rpt. in *Adventures of Huckleberry Finn*. Norton Critical Edition. New York : Norton , 1977 . 318 - 28 .
- Twain, Mark. *Adventures of Huckleberry Finn*. New York : Random House , 1996 .
- . *Adventures of Huckleberry Finn*. The Works of Mark Twain. The Authoritative Text , 2003 Edition. Berkeley : University of California, Press , 2003 .
- Woodard, Frederick and Donnarae MacCann. "Minstrel Shackles and Nineteenth-Century 'Liberalism' in *Huckleberry Finn*." Eds. Leonard, et al. *Satire or Evasion?* 141 - 53 .
- 井川眞砂「深南部へ向かう『筏』の事情 *Adventures of Huckleberry Finn* の一問題点」『奈良女子大学尾形敏彦・森本佳樹両教授退官記念論集』( 山口書店 1985 ) 467 - 78 .



- . 「『ハックルベリー・フィンの冒険』におけるジムの描写と20世紀の検閲問題—ジェイムズ・M・コックスの見解」『季刊・新英米文学研究』第18巻4号（総号142号）1987年11月、28-35.
- . 「深南部に向かう筏を再考する—『ハックルベリー・フィンの冒険』とマーク・トウェインの南部」井川真砂・新美澄子・福士久夫・村山淳彦 共編著『いま「ハック・フィン」をどう読むか』（京都修学社 1997）1-28.
- . 「『ハックルベリー・フィンの冒険』の手書き原稿—バッファロー・エリー郡立図書館の所蔵とランダムハウス版への抄録(I), (II)」『英語青年』第145巻1号（研究社）1999年4月、38-40；『英語青年』第145巻2号（研究社）1999年5月、86-89.
- 石原 剛 「ケン・バーンズの『マーク・トウェイン』〈多様の中の統一〉と現代アメリカにおけるマーク・トウェイン像」『マーク・トウェイン研究と批評』第2号（南雲堂 2003）75-85.
- . 「マーク・トウェイン・リターンズ—現代アメリカメディアに蘇るマーク・トウェイン」『マーク・トウェイン研究と批評』第3号（南雲堂 2004）108-10.
- 村山淳彦（書評）Arac, Jonathan. *Huckleberry Finn As Idol and Target: The Functions of Criticism in Our Time*. Madison: The University of Wisconsin Press, 1997. 『マーク・トウェイン研究と批評』第1号（南雲堂 2002）108-11.
- 渡辺利雄 「『ハックルベリー・フィンの冒険』、それはいったい誰のものなのか？—検閲と人種についての覚え書き」『日本女子大学英米文学研究』32（1997）25-40.

#### 付記

本稿は平成13年度—平成15年度科学研究費補助金（基盤研究 [C] [2]）の交付を受けた「アメリカ社会における〈白人性〉成立の学際的総合研究」の研究成果の一部である。